関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

大坂のねりもの

著者	北川 博子
雑誌名	阡陵 : 関西大学博物館彙報
巻	63
ページ	6-7
発行年	2011-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023897

大坂のねりもの

北　川　博　子

2011年春は、大阪らしい展覧会が開催されていた。一つは大阪歴史博物館の「上方舞・山村流」、もう一つは大阪くらしの今昔館の「なにわの遊楽―芝居・祭り・花暦―」である。ともに大阪市の博物館で、「文化の大阪市」をアピールできた好企画であった。本稿では、この二つの展覧会でも扱われていた「大坂のねりもの」について述べていきたい。

上方では寺社の祭礼の際に遊女や芸妓が仮装して練り歩く風習があった。京都では祇園の芸妓たちが祇園社の神輿洗いの日に練り歩くのが最も有名で、大坂では、新町、島之内、北新地等の遊女や芸妓が行っていた。このうち、旧暦６月15日の三津八幡宮の夏祭に行われた島之内のねりものについては、寛政10年（1798）刊『摂津名所図会』巻之四に、丹羽桃渓が描く挿絵（図１）があり、次の解説が載っている。

> 諸社の夏祭には　女伶　妓婦の輩いろ〳〵に姿を優して花の盛の匂ふが如く　身には錦繡を絡ひ　あるひは女も男に変り　若も老の風俗して　前囃子　後囃子に琴　三弦胡弓　太鼓　笛にていさましく拍子どり列り行を邃物といふ　特にみな月十五日御津八幡の祭には名にしおふ島の内の女伶風流に粧ふて練あるく　両側の青楼よりは妓婦の輩　共に花を飾て互に艶をくらべ　見に来る人もみなうかれて酒を勧め　ねり物すがたにて揚づめの一夜妻とするも難波津の繁花なるべし
>
> 夏祭人も潮のわくかこと　闌更

図１には、茶屋の座敷から優雅に見物する人や、立ったり座ったりしながらひしめき合って見ている人たちがいて、そこを楽器を奏でる先囃子が通り、続いて仮装して歩いていくねり子たちが描かれている。先頭の芸妓は汐汲み、次は曽我五郎の扮装であろうか。行列と見物の様子が活写されている。

ねりものの遊女や芸妓たちは一枚絵にも描かれているので、ここで、大坂の浮世絵について触れておこう。浮世絵は世界に知られた芸術であるが、誰でも知っている歌麿や写楽は江戸の絵師である。大坂の浮世絵は日本では馴染みが薄いが、海外では“Osaka Prints”として評価が高い。江戸の浮世絵は役者絵、美人画、風景画などがバランス良く版行されていたが、大坂では役者絵が圧倒的に多い。しかし、天保期に江戸で北斎や広重が描いた風景画が流行すると、大坂でも新しい名所であった天保山を描き始める。しかし、美人画は版行数が極めて少ない分野であった。

図１　関西大学図書館所蔵

その中にあって、「ねりもの図」は一群を成している。京都では合羽摺で、大坂では錦絵で版行された。合羽摺とは、着色したい部分に切り抜いた渋紙を置き、上から刷毛で塗っていく技法である。長崎絵にもあるが、主として上方で用いられた。大坂でも作成されたが、色板で着色していく錦絵が江戸からもたらされると、大坂では錦絵が主流となった。

ねりものに際しては、大坂・京都ともに、出演するねり子たちをリスト化した文字番付と絵番付が版行されていた。一枚絵のねりもの図には版行年が記載されていないので、これら番付と照らし合わせて年次考証を行うのである。

さて、現存しているねりもの図を概観しておきたい。一番多くの一枚絵が確認できるのは文政５年（1822）年６月の新町で、江戸から上っていた柳川重信による大判組物14種があり、ねり子12人全員と、その他に先囃子と後囃子の各１名が描かれている。先囃子については、大坂

浮世絵界の第一人者、北洲も作品を残している。重信はこの他に色紙判摺物も手掛けているが、これは遊女から贔屓への配り物として制作されたものであろう。さらに、京都の絵師長秀も細判合羽摺の作品を残していて、現在７種を確認している。

その後、文政８年８月の新町は、よし国の大判６種、同11年６月の島之内は国広・重春の大判７種と無款大判３種、天保７年（1836）６月の島之内は重春・北英・北寿・貞広・初代貞信が描く大判12種と雪渓が描く小判12種、同８年の北新地は重春・北妙・貞信・貞広が描く大判８種、弘化３年（1846）６月の新町は中判13種と小判18種があり、ともに芳梅画である。

それでは、具体的に、天保７年のねりものを見ておこう。図２は「天保七申年島の内ねりものの番組」と題された手彩色の絵番付である。ねりものが行われる予定の日付「六月十四日　十五日　十八日　廿八日　廿九日」と、ねりもののテーマ「雑徳山四季詠合」が記されている。見附台は松で、この後、ねりもの行列のねり子たちが、①「けさう文　いた駒小なべ」②「末広　大清小絹」③「うかひ　松屋ゑん」④「若菜つみ　中森新とら」⑤「羽衣　京喜きぬ葉」⑥「感陽宮　中森新小浪」⑦「華陽夫人　同ゑい」⑧「湯屋戻り　京扇子やてう」⑨「はした女　中森新松梅」⑩「一夜官女　北森新いく」と絵入で描かれ、最後に、囃子たちの三味線、太鼓、琴は名前が、笛、鼓、鉦は人数があって、最後に見送り台の御神馬が記されている。

この時の大判錦絵については、①⑥⑦⑧は重春、②③⑩は北英、④⑨は初代貞広、⑤は初代貞信が描いた作品がある。また、雪渓が描く①から⑩の小判錦絵も現存する。囃子では、三味線の大清小浪を北英が、同井筒屋二竜を北寿が大判錦絵に描き、大清小浪と太鼓の河音あいを雪渓が小判錦絵に描いている。

図２　関西大学図書館所蔵

図３　関西大学図書館所蔵

図３は関西大学図書館所蔵長谷川貞信コレクションの一品である。貞信は初代から現五代目まで血筋で継承されている上方浮世絵の画系で、関西大学図書館の初代から三代目までのコレクションは、収集の観点、分野、質と量等、世界最大の規模と水準を誇っている。

この絵を見ておくと、「島ノ内ねり物」「羽衣京喜きぬ葉」とあり、図版２の番付⑤と一致していることがわかる。ねりものは毎年新調される衣装に眼目があり、諸記録から柄や色などが忠実に描かれていることがわかっているが、江戸では禁止されていた金銀の絵の具も使われており、その豪華さが目を引く。

芸妓の名前の左にある「山村吾斗好」について解説しておこう。山村吾斗は前名山村友五郎、歌舞伎役者を廃業し、文化３年（1806）に今に続く上方舞の山村流を興した。山村流は現在では座敷舞の印象が強いが、江戸時代には歌舞伎舞踊の振付師としても活躍し、ねりものの衣装デザインや振付にも手腕を振るった。

上方のねりもの図は江戸にはない美人画として欧米では人気の浮世絵で、海外流出がかなり進んでいる。しかし、描かれた内容に関する研究はほとんどなされていない。そのためには、祭礼の行事としてのねりものを理解する必要があるが、ねりもの番付の現存率は低く、実態が把握しにくいのが現状である。本稿執筆に当たり、関西大学図書館を調査してみると、大坂で行われた様々なねりもの絵番付が多く所蔵されていることがわかった。今後、大坂のねりものを体系的に研究する必要性を感じているので、基本かつ貴重な資料として、これら絵番付の考察を深めていきたい。

【付記】本稿は平成23年度科学研究費補助金基盤研究（C）「上方浮世絵展企画に向けての国内外所蔵調査と作品の基礎的研究」（課題番号22520113）の研究成果の一環である。

阪急文化財団・関西大学博物館非常勤研究員